繆斌（ミョウヒン）工作は真実だった

1945年3月、繆斌は、「蔣介石の使者」として和平工作のために訪日した
小磯國昭総理、緒方竹虎、東久邇宮らが、強く推進しようとした
しかし、重光外相、杉山陸相、米内海相らが「重慶の謀略だ」と強く反対し、最後に天皇が工作中止の引導を渡した
この工作の真実性は、いまだ論争に決着がついていない
日中和平工作史上の最大の謎

2024.5•18　インテリジェンス研究会
報告者　太田　茂

始めに～～歴史研究には素人の私がなぜ和平工作史に関心を持ったか

きっかけは「ゼロ戦特攻隊から刑事へ（元読売記者西嶋大美氏との共著）」の執筆

※主人公大舘和夫氏は、16歳で予科練入隊(特乙1期）。台湾沖航空戦、レイテ沖海戦にも参加
フイリピンで特攻隊に「志願」し、関行男大尉の「敷島隊」の出撃を見送る
沖縄戦で、台湾の基地から7回特攻出撃するも敵艦と遭遇せず。8月15日の最後の
出撃直前、天皇陛下の「玉音放送」により出撃が中止され、奇跡的に生還
戦後は警視庁警察官となり、名刑事として活躍し、多くの難事件を解決
子供の頃からの剣道修行を97歳の今日まで続けている
同書は、英語、ルーマニア語、イタリア語等で翻訳出版

1945年2月、沖縄戦に向けて、特攻用のゼロ戦を国内で調達し、鹿児島笠之原基地から台湾に帰還しようとしていた前夜、**「三笠宮の侍従」と称する高級武官から、「三笠宮を護衛して上海に送って欲しい」と依頼され、「三笠宮」が搭乗する一式陸攻を、ゼロ戦で護衛して上海へ**

極めて謎が多い。その真実性の裏付け調査

「宮の目的は重慶蔣介石との和平工作のためではなかったか？」

私の調査•研究手法　～　一般の歴史研究とは趣が異なる

ア　犯罪捜査では、被疑者・被告人が、罪を否認するのみならず、証拠を隠滅することもある。それでも検事は、様々な情況証拠を丹念に収集し、それらを総合的・有機的に整理検討して犯罪と犯人を証明し、時には死刑の求刑すら行う

イ　情況証拠による事実の解明と認定は、**ジグソーパズルを組み立てるようなもの**
それだけでは意味が分からないパズルの一片一片であっても、置くべき所に置くことによって、事件の全体像が浮かび上がってくる

※アカデミズムの歴史研究分野では、基本的に事実を直接的に裏付ける文献資料に頼り、それがない部分についての推論を行うことには慎重。正確性は高いとしても、資料が残されていない歴史の空白を埋めることは困難な場合がある。学者間には「専門分野」「得意分野」の垣根もある

ウ　素人研究には、それらの制約にとらわれない利点もある。しかし、素人研究の中には、自分の仮説を立て、それを裏付ける事実や資料のみを引用し、反対ないし矛盾する消極証拠・資料の収集検討が乏しい「キワモノ」トンデモ本」が少なくないのも事実。「玉石混交」が著しい　⇒「情報の非対称性」が読者をミスリードする

エ　公刊され、入手できた約400点の文献資料により、論証を行った

※いわゆるオシント（Open Source Intelligence）の基本的手法

※真実性を裏付ける事実・資料も、否定論者が挙げる反対・消極事実や資料もくまなく検討した

（本論）　繆斌工作は真実だった

- その真実性について未だに決着がついていない、日中和平工作史上の最大の謎～～**私はその真実性を確信**
- **これが実現していれば、ヒロシマ・ナガサキも、ソ連の満州・北方領土侵略もなく、戦争は1945年6月ころには終結していた**
- **日本が侵略した中国の人でありながら、和平工作に心血を注ぎ、そのために漢奸として処刑された繆斌の遺徳と功績を日本人は忘れるべきでない**

※以下の説明の根拠資料については、下記拙著（いずれも芙蓉書房出版）を参照願いたい

①「日中和平工作秘史～～繆斌工作は真実だった」

②「新考・近衛文麿論～～悲劇の宰相、最後の公家の戦争責任と和平工作」

※この両書末尾に約400点の参考文献・資料のリスト掲載

③「OSSの全貌～～CIAの前身となった諜報機関の光と影」

繆斌の辞世の詩（1946.5.21「漢奸」として処刑）

浩気帰太真
丹心照万民
平生慕孔孟
死作和平神

（浩気、太真（※道教の言葉で宇宙究極の真理）に帰し、赤心、万民を照らす。
平生、孔孟を慕い、死して和平の神とならん）

「繆斌氏の行動の奥に光る東洋的叡智に合掌させられる～あの人のよい繆斌氏とは昵懇であったため、あの辞世の詩は悠々たる勝利者の心境である。～同年齢の私としては敗残無為の自分の、人間修業の未熟を顧みて慚愧に堪えないものがある」

中山優　（近衛文麿のブレーン、気骨の漢学者、日中和平に心血を注いだ）

鉄砲洲稲荷神社の慰霊碑

有志により建立
和平工作のため来日した碑文
東久邇宮との対面風景

無錫の繆斌の公館～名家だった

日中和平工作～～数十ものルートがあったといわれる

（前期）

トラウトマン工作

南京占領の戦果で舞い上がった軍部・政府・世論が和平条件を吊り上げて失敗

桐工作・銭永銘工作

汪兆銘工作と摩擦・競合のため実らず

汪兆銘工作

第3次近衛声明から「撤兵」条項を欠落させて汪兆銘の梯子を外した。南京政府は、興亜院で中国利権の争奪戦となり、当初から傀儡化して失敗

⇒　戦争が煮えたぎっている状況では、実現可能性は乏しかった？

（後期）⇒　日中の和平はアメリカなど連合国との和平につながる必要があった

近衛文麿・実弟水谷川忠麿らによる何世禎工作
近衛のブレーン中山優による傅涇波との工作
中国通の野人吉田東祐による工作　　「二つの国にかける橋」の著者
今井武夫による工作
満州のユダヤ人を救った安江仙弘大佐による工作
近衛の実弟近衛秀麿による対アメリカ工作
スウェーデンの元駐日公使バッゲによる工作、小野寺信大佐によるスウェーデン王室を介した工作
スイスのベルン、藤村義朗海軍中佐による工作
バーゼルの国際決済銀行の北村孝治郎・吉村侃、在スイス陸軍武官岡本清福、加瀬俊一公使らによる工作
バチカンのカトリックルートの工作

⇒これらスウェーデン、スイス、バチカンでの工作をアメリカ側で担っていたのはOSSのアレン・ダレスらだった
※OSSのスイス支局長だったダレスらは「サンライズ作戦」で、北イタリアのドイツ軍を降伏に導いた
⇒適切に進められれば、実現可能性があったが、政府や軍部の指導者たちが、ことごとく潰してしまった
※東條英機、佐藤賢了など最強硬派ですら、もはや和平しかないとの認識に至っていた。
※失敗の原因はすべて政府、軍部の絶望的なインテリジェンスのお粗末さ

繆斌工作
唯一、時の総理らが強く推進し、最高戦争指導会議で議論され、天皇の耳にまで達したもの。
成功していれば、ヒロシマ・ナガサキも、ソ連の満州・北方領土侵略もなく、1945年6月ころには蒋介石・アメリカ等連合国との和平が実現していた

和平工作とインテリジェンス

和平工作は100%インテリジェンスがもたらすと言っても過言ではない

※軍事作戦は、戦闘行為とインテリジェンスによる効果的作戦の計画・遂行

相手方の和平の意思の有無？　和平を求めるふりをした攪乱・情報獲得目的？　和平交渉のルートはどうする？　和平の条件、落とし所は？　国内の指導者層の意思統一の方策、開始時期

和平工作の多くは、当初「謀略」として始まる

「謀略」の三つの意味

和平の意思はないが、相手方の攻撃の矛先を交わすための攪乱目的

和平交渉を通じた情報獲得目的

和平の真意はあるが、正規の外交交渉などのレベルに至る以前に水面下で行う工作

※アレン・ダレスらOSSが、北イタリアのドイツ軍を降伏に導いた「サンライズ作戦」は、このような意味の「謀略」の真髄だった（拙著「OSS（戦略情報局）の全貌」参照）

繆斌工作の概要

繆斌とは？

　江蘇省無錫の生まれ。父は著名な道教の士。小さいころから極めて優秀。名門南洋公学に入学。朱子学、陽明学を学び、在学中から国民党に加入。反軍閥闘争に参加し、孫文、汪兆銘の知己を得る。

　1924年、黄埔軍官学校教官に就任。第一次国共合作により周恩来らと接するも、唯物論に納得せず反共産主義の思想を固めた。同校に戴笠がおり、師弟関係となった。共産軍反乱鎮圧のため、何応欽の部隊で戦闘に参加し勇名を馳せた。北伐にも参加し、何応欽とは兄弟のような仲となる

　若い時から、日本の歴史、文化を深く学んだ。日中関係の悪化を強く憂い、両国が連携して共産主義の制覇を防ぐべきだとの信念を一貫して変えず。日中戦勃発で蒋介石が抗日戦を開始したため、袂を分かった。北京で創設された日中の友好組織新民会の幹部として両国の連携和平を模索した。根本博大佐ら良心的軍人、小澤開作（指揮者故小澤征爾氏の父）らとの深い信頼関係を築いた。しかし、新民会が日本軍部の支配に染まったため、石原莞爾らの東亜連盟の活動に転じた。南京に移り、本工作当時は、考試院副院長

　日本を度々訪れ、権藤成卿、頭山満、安岡正篤ら要路の人々と親交を深めた。新民会当時から、部下の横山銕三、元朝日新聞記者田村眞作らと、日中の連携和平を模索していた

　　※戴笠は、繆斌工作指導のキーパーソン

工作の発端

小磯國昭は、拓務大臣当時、繆斌と会談

田村眞作は、新民会活動を通じて、繆斌の学識・思想、日中連携への思いを畏敬し、緒方竹虎に紹介

小磯は総理になってから、士官学校同期の親友で中国通の山縣初男大佐に、繆斌による工作推進を求めた

1944年12月、山縣は上海に渡り、繆斌と密接な工作打ち合わせを開始し繆斌と具体的な和平案を練った

※田村は、朝日新聞記者だったが、上司の緒方竹虎から「君は中国との和平に全力を打ち込んでくれないか。家族のことは心配するな。僕が何とかするから」と言われ、退社して新民会活動に入った

工作の開始　　顧敦吉が、蔣君輝に、協力を懇請

国民党の特務機関の上海地区の責任者だった顧敦吉（陳長風）中将が、深夜突然、蔣君輝を尋ね、繆斌に同行して訪日することを懇請。顧は、大学時代に蔣の学生だった

「～命令を受けて重大問題を先生にお願いに上がった～日本はごく近々全面降伏を迫られつつある～なるべく最悪の事態を避け、もし中国と接近の道があれば、早く中国と和平を求め、中国を通じて連合国に対し和平を要請し、戦争を終結したいと望んでいる。この意見を持っている者は日本側は総理大臣小磯、情報局総裁緒方、皇族東久邇宮たち。この話をわが方にもって来た者は繆斌で、彼と日本人との間の連絡者は山縣大佐。この話を今持ち出すことは日本にとって誠に時宜を得たものというべきだが、我が方はその真相を知らない。2月20日に繆斌が自分の案として日本に行き、主脳者と話し合う手はずで、日本から飛行機を一台提供することが決まっている。同行者は繆斌、無電技手二人、顧問一人、外に二人の都合七人で、その中で最も重要で一番難しい人選は顧問役～～、繆斌は確かに日本人間に顔が広く、自分と親戚関係があって自分の父親たちを憲兵から救い出したこともある～～しかし、中国人の中ではこの人ほど無常反復すなわち信用のできない人はいない～～それで顧問一人を物色して、繆斌が日本側から聴き取った話を中国にどんなに伝えるか、その間に差違がないかどうか、顧問は繆斌の言動を十分に監督し～～その接触した経過を逸早くわが方に伝達するために無電技手二人を連れていく必要がある。目下、日本はすでに七人の座席を許可しているが、肝心な顧問がまだ決まっていない。顧問人選の条件は三つあり、一つは我が政府にも傀儡政府にも無関係でしかも現に日本軍の占領区域にいる者。二つは然諾を重んじ信用し得る者。三つは日本語に熟達し、繆斌と日本人との間の話を漏れなく聴き取れるという者で、私は以上の三条件について人を詮衡せよという命令を受けている。～3人を推薦したが、三人とも却下されてもうこれ以上適任者がいないと言ったところ、『上海に蔣君輝が居るではないか、探せ』という蔣委員長の命令が下りました。～枉げてご承引を願います」

と熱心に説いた。蔣君輝は、悩んだ末に決断

蔣君輝とは？

蔣君輝は、軍人でも政治家でも外交官でもなく、
学者・教育者
「生きている論語」と呼ばれた人格者で、重慶からも南京からも高風を仰がれていた。戦後日本に渡り、その人徳・功績を知る多くの日本人と交友。彼らが蔣を讃えるため「扶桑七十年の夢」を刊行した。神奈川県の善徳寺にある「戦没台湾少年の慰霊碑」の碑文は、蔣の揮毫。「蔣君輝敬書」とある

顧敦吉が蒋君輝に説明した繆斌の和平工作案
～～極めてよく練り上げられたものだった

① 汪政権側が自発的に解消声明
② 同時に重慶側において承認する民間有力者で、民意による「中華民国国民政府南京留守政権」を組織
③ 留守政府成立と同時に、留守府は重慶の中央政府に対し、留守府において暫時の間地方秩序を維持し、中央政府は速やかに南京に遷都されたき旨の通電を発する
④ 留守府は同時に、日本に対し全面和平のため速やかに停戦撤兵されんことを希望する旨の通電を発する
⑤ 留守府政権成立後、直ちに停戦および撤兵に関し日華双方より軍事代表を出し、紳士協定を結ぶ。おそくとも2年以内に全中国にいる日本軍は撤退できる。降伏ではないから日本軍は武装のままで撤退ができる
※このほかにも「南京政府の要人は日本で受け入れる」と配慮した点もあった

顧は、「いよいよの時になったら、きっと連合国と歩調を合わせて進行します」と断言

「繆さんは意味深い笑いを浮かべながら私に言っていた。『満州と華北はなかなか複雑です。重慶側からは今度はあべこべに日本軍にもう少しいてくださいと頼むようになりますよ』」（田村眞作）
⇒重要な「ジグソーパズル」の一片
※ 蒋介石は、日本降伏の後ですら「以徳報怨」により、日本将兵の名誉を傷つけず200万軍民の早期帰国を実現

この工作真実性の「壺」～～その1

ア　蔣介石は繆斌を信じていたわけではなかった。蔣介石にとっては外から飛び込んできた話だった。上手くいけばこれまでのどのルートよりも成功の可能性が高い。

　しかし、もし失敗すれば繆斌を切り捨てればよい（歴史はその通りになった）。蔣介石は戦後の回想で工作を「焦る日本が試みた茶番」と切り捨てた（蔣介石秘録）

　　※蔣介石は、「墓場まで持っていくしかない」事実だったろう

イ　蔣介石は、1945年秋頃から、信頼できる幾つかのルートを通じて日本に和平のシグナルを送っていた（満州のユダヤ人を助けた樋口季一郎、岡村寧次大将、吉田東祐など）

　それらのメッセージは一貫し、顧敦吉が蔣君輝に伝えたものと同じだった

中国人は「組織」より「人」を見る。人物眼の確かさには驚くべきものがある　⇒組織や肩書で評価しがちな日本人との違い

※岡村寧次支那派遣軍総司令官は、香港ルートで送られてきたメッセージを黙殺した。中国戦線では日本軍は負けていなかったからだ。戦後、岡村は、正直に回想した。

「こっちはカイロ会談も知らなければ、国内が痛んでいるのも知らないから、（蔣介石は）実に生意気なことを言うと思っておったですよ。ところが、向こうは日本を負けさせたあとのことまで決めちゃっているんだから、非常に親切な言葉なんです。～戦後わかりましたけどね。その時はまるでピントが合わないんですね。私と重慶とは。～～向こうはどうかして日本をあんまり痛めないうちに、戦いをやめさせなければと考えていたんですね。私なんぞ何も知らずに、アメリカの方のけん制のために、一ぺん重慶大侵攻作戦をやろうとしていた。実際ものを知らざるもはなはだしいものだとあとで思いましたがね。～～バカだったと後悔しますよ。何も知らずに～」

※岡村は「焼くな、殺すな、犯すな」を強く将兵に命じていた。　戦後、「塘沽協定あたりで（華北侵攻を）止めておけばよかった」とも回想した

ウ　連合国共同宣言では、単独での枢軸国との和平は禁じられていた。そのため蔣介石は、共産主義者の目が光る中で、極秘で和平工作を進める必要があった。道筋が決まれば電光石火、和平に舵を切る。西安事件、盧溝橋事件後の、意に反した国共合作を一気に裏返す肚だったのだろう

この工作を担った人々

（日本側）

小磯総理、緒方竹虎、山縣初男、田村眞作（元朝日記者）、南部圭助

※東久邇宮、石原莞爾や阿南惟幾（当時航空総監）も支援

阿南は、杉山の後任として鈴木貫太郎内閣の陸相となった。その直前に、

「自主的撤兵ならする。小磯はやめる必要はない。陸軍に繆斌工作を協力させる」と言ったが、間に合わず、小磯内閣は潰れてしまった。阿南は、対ソ和平工作には反対で、重慶と和平すべきだと密かに考えていた

「もし許されるなら、私が重慶に行って命がけで蔣介石と交渉するのだが」

※阿南は勇猛な指揮官だったが、捕虜への人道的な待遇にも努めていた

※侍従武官勤務を通じて天皇からの信頼も厚かった

※阿南は、ポツダム宣言受諾の時、強硬派で反対したといわれるが、内心は早くから和平を考えていた

※拙著「新考・近衛文麿論」中の「補論・海軍と陸軍の和平への対応と責任論」で詳述

（中国側）

蔣介石 ⇒戴笠 ⇒顧敦吉（陳長風） ⇒繆斌 ⇒蔣君輝

※戴笠は蔣介石の右腕。特務機関藍衣社のトップ。重慶の大使館等の親共産主義者ら（「4人のギャング」サービスデービスら）は、ワシントンに「戴は冷酷なテロリストだ」との非難を送り続けた。しかし、戴が人々から尊敬される極めて優れた指揮官であったことは、M.マイルズの A Different Kind of War が詳述

※顧敦吉は重慶の特務機関の上海地区の責任者だった

もし、この工作当時、阿南が陸相で、東郷が外相だったら……・

工作の進行と挫折

反対派の妨害・抵抗

※2月の訪日予定が1か月近く遅延

※当初、繆斌、蔣君輝を始め、電信官・機器を含む7人の訪日予定が、繆斌1名のみとされてしまった

（アリバイ的）　⇒当時、電信の傍受は当たり前だったから、重慶と繆斌とのやり取りを把握し、工作の真偽を確認できたはず

3月17日　繆斌が一人で来日

小磯、緒方、東久邇宮と懇談

3月21日　最高戦争指導会議

小磯・緒方が懸命に工作進行を主張するも、重光外相、米内海相、杉山陸相が強く反対

※最高戦争指導会議は、わずか40分で終了。終了後、陸海外三相のみで、「本件はあまりに無謀の挙にして、会議続行の要なし」と意見が一致

4月2日　小磯が天皇に工作進行を上奏

4月3日　重光が天皇に反対の上奏

4月4日　天皇が小磯に工作中止の引導を渡す　⇒小磯内閣総辞職を決意

4月7日　内閣総辞職

繆斌は、篤志の者の家にかくまわれ、4月25日に上海に帰る。この間、山形から上京した石原莞爾と語りかした

工作を潰した重光らの反対論など

① カイロ宣言で縛られている蒋介石に和平の意思はない

※広田弘毅も2月9日の天皇への重臣上奏で、「支那ニ対シテハ如何ナル方策ヲ講ズルモ蒋ハ身動キ出来ヌ情勢ニ在リ」と述べていた（『昭和天皇実録第九』）

② 和平工作は南京政府を通じて行うべきだ（最高戦争指導会議の方針、対華新政策を推進した重光の意向）

⇒南京政府は、重慶にとって「子供の使い」のようなもの。幹部には重慶が逮捕令を出していた周仏海らにとっても大きな迷惑（周仏海日記によく表れている）。姑息なやり方だった

③ 繆斌は肩書がない、蒋介石の委任状をもってきていない

⇒ほとんど因縁（インネン）に近い、官僚的な建前論

「国民政府を対手とせず」とし、日本の敗戦が必至の状況で、信じがたい能天気さ

⇒重光は戦後ですら、読んでいて胸が悪くなるほどの小磯、緒方らへの人格中傷

④ 支那派遣軍総参謀副長の今井武夫は、帰国して工作潰しに「狂奔」（高宮太平の「人間緒方竹虎」）

※今井の功罪

盧溝橋事件の時の現地解決、桐工作で重慶との和平に心血を注いだ稀に見る良心的な陸軍軍人。反面、他者による和平工作を嫌い、近衛文麿、水谷川忠麿らが進めていた「何世禎工作」を妨害し、繆斌工作を潰した

⑤ 電信官も含む7人の訪日を断り、繆斌一人のみを訪日させた姑息なやり方

※サンライズ作戦で、ダレスらが、「リトルウオリー」を無線機器と共に派遣し、SS本部に連絡拠点を設置させたこととの対比は鮮明たか？

工作の終焉～～天皇が工作中止の引導を渡した

4月3日　宮中より（重光に）突然の御召（重光葵手記）

天皇

「此前も聴いた繆斌の事ね～～繆斌は一体重慶の廻し者とも見らるべきもので、果たして利用し得るかも分からぬ者を連れて来る等は如何かね～～いくら忠誠なる日本軍隊でも、船舶の欠乏の今日、三か月以内に撤兵することなぞ不可能に思はれるし、又南京政府、上海市政府を取消することは国際信義に反することである。大義名文上考えねばならぬ。昨日小磯総理にその事を談したら、総理は自分の言葉を返して、繆斌を此儘返すは惜しいような談をして居った。それ今日、陸海軍大臣を呼んで意見を聞いて見たら、陸軍大臣は繆斌の如きものを利用する等は以ての外であると云ふて強く反対意見を述べ、次で海軍大臣は一国の総理が彼れの如きものを招致して重要な談をするのは無謀も甚だしいと云ふておった」

※昭和天皇独白録でも同様の回想

※「三か月以内の撤兵」など全くの嘘。「大本営機密戦争日誌」には、1945年3月20日の欄に「繆斌の和平思想は（イ）国民政府抹殺、（ロ）即時無条件全面撤兵、とある。反対派の閣僚らから極めて悪意に捻じ曲げた上奏がなされていたことが明らか

⇒繆斌が考えた撤兵は、「2年以内」。「降伏」ではなく、日本軍の名誉を保った武装のままの撤兵だった

満州には一部の日本軍を残す含みもあった

南京政府の名誉や要人の処遇にも行き届いた配慮があった

この和平工作実現のため上海に「善後委員会」が設けられ、七処（※日本では「課」に相当）を設けてその人選まで用意された。「かくして、今度こそ日本側が誠意を持つだろうと推察してその出方を待った。しかし、その後東京からはなんらの楽観的材料は送って来ず、5月25日、ついに顧敦吉は「和平撤兵の交渉を止めよ」との重慶からの電報を受け取り、この工作は失敗に帰した（蔣君輝）　⇒　和平条件にあった「留守府」設置の準備作業だろう

戴笠の墜落死と繆斌のスピード裁判

日本の降伏後、繆斌は、蔣介石から8万元を授与されて褒賞され、公館で悠々と暮らしていた

（推論）工作は失敗したが、蔣介石は、戦後の日本との連携を求めていたので、総理や皇族にまで人脈を築いた繆斌を「使える人間だ」と考えていたのだろう

戴笠が、1946年3月19日、墜落死。後ろ盾を失った繆斌は、その二日後に逮捕され、僅か2か月のスピード裁判で死刑となった

※他の「漢奸」被告人より、遥かに早い裁判。他の大物たちの裁判は、6か月～1年程度かかった

※戴笠の墜落原因には、CC団説、共産党説、OSS説など様々

（現行犯でもない限り、二日後の逮捕はあり得ない？　陰謀の疑い濃厚？）

※東京裁判で、繆斌が、戦争中、国民党が密かに日本と和平しようとしていたことが明るみに出るのを、蔣介石は恐れたと推認される

※戦後、共産党政府で国家副主席まで務め、「赤い資本家」と呼ばれた栄毅仁（無錫出身）は「繆斌は、なぜ処刑されたのか」、と度々疑問を呈していた

真実性、実現可能性の最大の鍵は二つ

1　連合国から軍事支援を受け、カイロ宣言で中国の主権と領土の回復を約束されていた蒋介石に、敗戦寸前の日本と和平する意思があったか？

2　アメリカ等連合国をも和平に引き込める可能性があったか？

※連合国共同宣言で、枢軸国との単独和平は禁じられていた

蔣介石には日本との和平の意思があった

ア　元々、蔣介石は反共で、日本との連携を求めていた

イ　師の孫文は、頭山満、玄洋社の人々の命がけの支援で、辛亥革命を実現した

蔣介石自身も、頭山を「師」と仰いでいた

※戦後GHQや東京裁判は頭山・玄洋社・黒龍会を日本軍国主義の元凶だとレッテルを貼ったが、これは誤っていた。頭山は、列強のアジア侵略に対抗し、アジア諸国が独立するため日清・日露戦争を後押しした。しかし、頭山は、いずれ国民党が力をつければ満州をその手に委ねてよいと考えていた。盧溝橋事件発生後、事変の深刻化を憂い、1944年に亡くなるまで水面下で重慶との和平工作を試みていた。頭山や近衛篤麿の「大アジア主義」は戦争が泥沼化してからの後知恵だった「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」とは異なっていた

ウ　蔣介石は若い頃、訪日して新潟の陸軍の高田部隊に配属され、上官から暖かく指導を受け、日本将兵の規律、士気の高さを学んでいた

エ　蔣介石はソ連に留学して共産主義は三民主義と合わないことを痛感し、真の連携の相手日本だと考えていた

オ　今は、日本は軍国主義者の狂気に支配されているが、天皇は平和を愛し、指導者たちの多くは日中の連携と友好を望んでいることを知っていた

カ　蔣介石が、抗日戦に転じたのは、日本軍の露骨な満州、華北侵略に対し、日本に融和的な姿勢を取ることが、その政治基盤を失わせてしまうことになるためだった

※塘沽協定、梅津何応欽協定、土肥原秦徳純協定、華北分離政策、蔣介石の下野要求など

キ　元々「安内攘外」の方針の下に、共産党廃絶のための剿共戦を重ねていた。西安事件以来、それが許されなくなり、国共合作に至ったがそれは蔣介石の本意ではなかった。国民党軍と、八路軍・新四軍とは軋轢が絶えず、戦争末期には内戦に近い状態になりつつあった

ク　戦局の推移に応じ、蔣介石は、日本との和平の可能性と条件を探っており、その程度内容は変化していた（鹿錫俊教授の研究）

アヘン王里見甫の地獄耳～～政府軍部の指導者よりも遥かに正確だった

東久邇宮日記の1944年2月2日の欄　⇒極めて重要なジグソーパズルの一片

「若松華瑶、里見甫来たる。里見は永く上海にいて支那人の知人多く、一日本人として陸軍の意をうけて、重慶政府との和平交渉の第一歩をふみ出しつつある。里見は次のように話した。『蒋介石は、カイロ会談（1943.11.22～）でルーズベルト・チャーチルと会談して大いに得意になっていたが、テヘラン会談（1943.11.末～）では、スターリンが蒋の出席を好まずとの理由で、ルーズベルトから出席を断られた。その後になって、実はルーズベルトが蒋の出席を好まなかったことが判り、ウソをついたといって、蒋は米国に対して大いに不満をもった。それから、蒋は日本との和平に心が動きつつある。蒋の基本条件は、日本が重慶政府を中華民国の正式政府と認めて和平交渉をすべしというにある』」

※極めて正確な状況認識～カイロ・テヘランの僅か2か月程度後　（里見の生涯は、佐野眞一、西木正明の本に詳しい）

※『蒋介石秘録』の1945年3月15日　⇒繆斌訪日の二日前

「ヤルタ会談で果たして中国は売られてしまったのだろうか。もしそうならば、このたびの黒海（ヤルタ）会談では、ソ連の対日参加が決定した、と断定できる。そうだとすれば、われわれの抗日戦争にかけた理想は夢まぼろしになってしまうであろう」

※蒋介石はヤルタ間もない頃、ハーレー大使に、中国が裏切られたことの調査を依頼。ハーレーは、ワシントンに行き、ルーズベルトに質し、密約を知って強く抗議。　ルーズベルトの承認を得て、訪英・訪ロ。チャーチル、スターリンに、密約取消しを求めたが実らず。重慶帰還後、蔣介石に報告（パトリック・ハーレー伝（未邦訳））」

※里見は、莫大な阿片の利益を、日本軍のみでなく、国民党にも共産党にも与えていた。私腹は肥やさなかった

「私利私欲に恬淡な人だ～付き合って気持ちがいい。天馬空を行くようなきっぷのよい男だった（リベラルの松本重治）」

里見は修猷館卒。頭山満・玄洋社らの「大アジア主義」の思想の流れが感じられる

※情報源は杜月笙（青幇の首領）だっただろう。上海の表社会も裏社会も築いていた杜は、蔣介石の右腕の一人で和平工作にも従事していた（周仏海日記）。里見が上海で阿片の密売をするのに、杜との対立は許されない。上海に米軍が上陸して戦場となり、破壊されることは、杜が一番恐れることだった

※杜は、日本敗戦後の米軍の上海上陸を取り仕切った（M.マイルズの「A　Different Kind of War」に詳しい）

アメリカを和平に引き込むことはできた

アメリカ国民・政治家は、真珠湾攻撃以来、日本や天皇制を憎み、無条件降伏方針を支持する層が厚かった。しかし、天皇制を認めることにより、日本を早期降伏に導くのが賢明だと考える政治家、人々も少なくなかった

ア　ルーズベルトの側近には親ソ連・共産主義者が少なくなく、彼らは無条件降伏方針を維持することで、ソ連がテヘランやヤルタでの密約に基づいて参戦するまで終戦を遅らせようと考えていた（ハードピース派）

イ　他方、ソフトピース派の人々は、元駐日大使で国務次官となっていたジョセフ・グルーがその中心。グルーは、天皇は平和を愛し国際協調を重んじており、天皇制の存続は日本が平和国家として再生する上で重要な意味を持つので、それを保証することが日本を早期の降伏に導くことになると考えていた。ステイムソン陸軍長官や、海軍のフォレスタル長官も、ソ連は不誠実な敵であり、その参戦は不要で、天皇制を認めて早期に戦争を終わらせるべきだと考え、ポツダム会議の当時には、ポツダムに飛んでトルーマンにソ連の参戦をさせない説得しようとすら試みていた

ウ　アメリカが最も恐れていたのは日本本土上陸による膨大なアメリカ将兵の犠牲だった。サイパン、硫黄島、沖縄戦での日本軍民の凄まじい抵抗ぶりは、その恐れを倍加させた。本土上陸作戦で数十万人の犠牲が生じると考えていた。これは、立場を問わない共通の理解だった

エ　蒋介石の日本との和平は、アメリカに対する「ブラフ」にもなり得た（推論）

※「中国が共産党やソ連の支配下に落ちる前に、日本と和平しましょう。アメリカが応じないなら、国民党は単独で和平しますよ。100万の日本軍の半分は本土に帰し、残りはしばらく中国に留めて満州・華北の防衛に当たらせます。アメリカはそうなってもいいのですか？

⇒繆斌が田村眞作に話した言葉　「重慶側からは今度はあべこべに日本軍にもう少しいてくださいと頼むようになりますよ」

※　国民党が、苦しい戦いで100万人の日本軍を中国大陸に引き付けていたからこそ、米英は太平洋戦を有利に進めることができた

※　蒋介石は以前からも、連合国から軍事援助を引き出すために、日本との単独和平カードをちらつかせていた

※　ヤルタで中国を裏切っていたルーズベルトは、蒋介石に反論など言えた義理ではない

⇒蒋介石はルーズベルト説得に強い自信を持っていたのだろう。それは工作の見通しがついてから一気に行う肚だったろう

この工作真実性の「壺」～～その2

（繆斌には和平以外の目的はなかった）

① 名家の資産家。金目当ての「和平ブローカー」ではなかった

※小磯が提供しようとした渡航費も辞退

② 敗戦必至の日本に対して恩を売るメリットもなかった

③「漢奸」と非難されるリスクは極めて大きかった

（重慶・蒋介石により派遣されたことは争いがない）

天皇も重光も**「重慶の回し者」**と認識　⇒「逆説的真実」

※指示も受けず権限もないのに、金目当てで、それがあるような振りをするブローカーとは違う。**詰まるところは、重慶の和平意思の有無**

（繆斌の状況認識は極めて正確だった）～重慶サイドから顧敦吉を通じて情報を得ていたのだろう

① 「アメリカ軍が中国には上陸せず、沖縄から本土を目指す」

※当時、日本軍も南京政府も、アメリカ軍が中国に上陸すると考えていた

② 「私の東京滞在中、空襲はない」と断言

※訪日前の連日の激しい東京空襲（2月25日には皇居までが空襲被害）が、滞在中ピタリと止んだ

※工作の真実性を否定する人も「こればかりは不思議だった」と回想

この工作真実性の壺～～その3

天皇も重光らも「南京政府への信義」に強くこだわっていた。しかし、南京政府の要人らは、その傀儡化を失望しており、政府存続への未練はなかった

（汪兆銘）

1939年にハノイから上海に脱出する船中で影佐禎昭らと会談した際の言葉

「自分の運動の目的は～和平を招来せむとする外何ものでもなく和平さへ出来れば政権は誰が握らうがそんな事は敢て問ふ所ではない。自分の和平運動の目的は重慶政府をして和平論に傾かしめ抗戦を中止せしめむとするにある。従て将来重慶政府にして自分の運動に合流し来る場合に於ては既に運動の目的を達したのであるから自分は断然下野する事は何等の躊躇を要しない」

（周仏海日記）樹立当時からその失敗を自覚し、南京政府の解消にはなんらこだわらないことを、頻繁に記載していた（1938年から終戦近くまで数十か所）

- 決して反蒋の意図はなく完全に和平を主張することにある
- 将来和議成立の際は、余は一切を捨て去り、一平民となる
- 武漢にいたときの日本に対する観察が非常に誤っていたものであり、～～抗戦派の主張は正しかった
- 蒋介石が和平に応じるなら我々は下野してもよい
- もし撤兵が行えるのなら、南京政権の取消しも惜しむに足らぬ
- 日本軍部の中国に対する誤った認識は少しも改まっていない～絶望となれば必ず不賢明さを認めず我々のせいにするだろう

⇒　天皇や重光らの「南京政府への信義」は「贔屓の引き倒し」のようなものだった。重光の「対華新政策」はイソップの狼少年のようなものだった。バチカンの聖職者たちもは、①これまでさんざん敵対政策を採り続けておきながら、いまさら路線変更してもすでに遅すぎる、②中国人はそのような見え透いた宣伝文句に騙されるほどお人よしではない、と見抜いていた

この工作真実性の壺～その4

「やんちゃな宮様」と言われた東久邇宮の方が遥かに正しく洞察していた

東久邇宮は、工作を否定しようとする杉山や梅津にこう語った。

「中国では、一国と一国の和平交渉とか、同盟、連合とかにはいきなり国王が直接交渉することはない。はじめは布衣（ほい～官位や身分のない者）の士が、内々に国王にたのまれたり、大臣にたのまれたりしてやる、そしていよいよ話がまとまったところで、はじめて、公式に談判が開始される～～これが中国の建前だと思う。特に、今日の日本と重慶とは戦争をしている。おまけに「相手にせず」といっているときに、どう考えても重慶から正式の使者が来るわけがないではないか。第一に、蒋介石氏の立場として、委任状を日本に持たせてよこす～　と考えることすら誤りである。委任状なく、地位もないところがかえって面白い。信用が出来るとか、出来ぬとかいうが、よしんば詐（だま）されてもよいではないか」

⇒「繆斌は肩書がない、蒋介石の委任状をもってきていない」などの杉山らの反対論との落差の大きさ

サンライズ作戦で、連合軍の将軍二人が初めてドイツの和平派将軍と会談したとき、二人は変装し、偽名でスイスに乗り込んだ

※　東久邇宮はみずからを「やんちゃ坊主」と語るなど、奔放な青春時代を送った。陸軍士官学校を卒業し、1920年フランスに留学軍事関係ではなく、社会主義の教師も多い「政治法律学校」に入校し、資本論も読むなどした。モネや藤田嗣治ら多くの芸術家と深く親交するなど自由奔放な留学生活を送った。老政治家クレマンソーを紹介されてたびたび会った。クレマンソーは宮に、「アメリカは必ず日本に戦争をしかけてくるだろうが、日本はアメリカには絶対に勝てないから我慢しなければならない」と繰り返し語り、宮はこの忠告を忘れなかったという

OSSのダレスの回想（「静かなる降伏」）

サンライズ作戦の成功はOSSに自信を与えた。これにより、イタリアが共産化し、あるいは南北の分裂国家となることを防いだ。その後のスェーデン、スイス、バチカンルートの和平工作をアメリカ側で担っていたのは、OSSだった

「残念なことに日本のケースは、われわれにとって時間切れになった。われわれの方に和平への確実な道があり、彼らが交渉しているアメリカ人がワシントンの最高権力筋と直接の連絡を持っているということに東京の政府が確信を抱く前に、モスクワが仲介者として現れ、日本政府はソ連を通じて和平を求めることに決した。～～もし、この交渉チャンネルを発展させるもう少し時間を与えられていたとしたら、日本の降伏の事情はもう少しちがってものになっていたかもしれない」

日本の指導者の絶望的なインテリジェンスのお粗末さ

戦後の外務次官の発言

「例のアレンダレス辺りのはね、あんなもの無意味ですから～～僕らは情報を持っていたけど、そんなものは相手にしたくもない～～謀略だと思うよ」

※ここでも「謀略」の意味を理解できていない。戦争に勝っているアメリカの方が救いの手を差し伸べていたのに、日本はその可能性をすべて自ら潰した

蔣介石との和平のルートを潰し、ソ連・延安共産党を志向した和平工作の誤り

（指導者の恐るべき能天気な認識）

鈴木首相　「スターリンは西郷隆盛のような人だから悪いようにはしないだろう」

木戸幸一　「共産主義というが今日はそれほど恐ろしいものではないぞ。世界中が皆共産主義ではないか。欧州も然り
支那も然り、残るは米国位のものではないか」

井上成美（1945年2月頃）
終戦の一つの方法は海軍が中支那を明け渡すことだ。そこに中共軍は入ってくる。アメリカの太平洋作戦の目標は～～中国市場を手に入れることだ。ところが中支那が中共の勢力に入ればアメリカは戦争目標を失うことになる

高木惣吉　高木は、1944年夏から、米内・及川・井上の指示で和平工作研究に従事
しかし、蔣介石との和平努力を棄て、延安共産党に志向した和平に転向

松谷誠（陸軍秘書官）らの研究

「7～8月ころ、ソ連が米国との関係で東亜の処理に対するキャステイングボードを握ろうとして日本に和平勧告を行うだろうと予測。その機会を利用すべきであって、和平条件としては国体護持のみを最後的条件とすべき～～、その理由として①スターリンは～人情の機微に即せる左翼運動の正道に立っており、したがって恐らくソ連は我が国に国体を破壊し、赤化せんとする如きは考えないであろう、②ソ連の民族政策は寛容のものであり、スラブ民族は人種的偏見が少なく、民族の自決と固有文化を尊重し～ソ連は我が国体と赤は絶対に相容ざるものとは考えないだろう、～～④戦後我が経済は表面上不可避的に社会主義的方向を辿るべく、この点からも対ソ接近が可能であろう、⑤米の企図する日本政治の民主主義化よりも、ソ連流の人民政府組織の方が将来日本的政治への復帰の萌芽を残し得るであろう」

アメリカでは、戦後議会の非米活動調査委員会やマッカーシズム（行き過ぎはあったが）により、戦争中の共産主義者たちの活動を究明。
尾崎ゾルゲ事件以外に、一体どのような人物勢力が暗躍して、これら指導者に擦り込んだのか、日本ではまだ解明されていない？

戦後の出来事など

ア　蔣介石の「以徳報怨」

蔣介石は、200万人の日本軍民の早期帰国を実現させ、賠償請求や日本領土の分割占領も断り、日本の戦後復興を大きく支援した。**これには、人道的な意味だけでなく、遅ればせであっても、日本を回復不能に陥らせず、連携して共産党やソ連に対抗しようというしたたかな意図もあっただろう。本工作が実現していれば、それをずっと早くもたらすことができていたはずだ**

※戦後岸信介首相が台湾を訪問し、蔣介石に「以徳報怨」のお礼を述べた。蔣は、「(この考えは)実は、自分が留学した際に学んだ武士道の精神です。特に頭山先生、犬養先生という方々から実践を通じて教え込まれたものです。それは、東洋思想の基本であると同時に、日本の精神です。だから、私に感謝するというよりも、日本自身がもっている諸先輩の精神に感謝してください」と語った

(蔣介石の2面性)

クリスチャンであり、優れた政治家・軍人であったが、いざとなれば、徹底的に冷酷になれた

日本軍の侵攻を遮断するために、揚子江の堤防を決壊させたことなど

戦後、台湾に逃れたが、大陸奪回作戦態勢のため、台湾国内では弾圧的政治体制を敷いた

イ　小磯の東京裁判の弁護人三文字正平の重光に対する怒りと批判

三文字は、昭和56年の「人物往来」に「葬られた繆斌工作」と題する貴重な記録を残した。　三文字は、小磯とは古い知己で、繆斌工作を強く支援していた。三文字は、小磯内閣の組閣時、当初、蔵相、軍需相と重光外相の3人が、東條内閣当時のまま留任となっていたのに反対し、三相とも交代させるべきだと小磯に強く進言した。しかし、木戸幸一や米内海相が、重光だけは残すようにと動いたために重光が留任することとなった。三文字は、同稿の冒頭に「小磯内閣のガン・重光の留任」と題してこれを厳しく批判した

繆斌が蒋介石の意思を受けて来日したことを示す資料には、この工作のために重慶と交信した暗号電報綴りもあった
その中に次の電報があった

「礼●子電悉、繆斌請求指示事項、可照前在滬与山県所、商定之原則進行、万勿譲、並将洽談情形、
随時具報、為要
礼廻午義仁甲渝六七〇号」

（訳文）

「3月15日の電報承知した。繆斌の請求して来た指示事項は、前に上海で山県と商定した原則に照し進行させ、決して譲歩するな。なお交渉の様子をその時々詳報せよ」
3月24日午の刻、重慶義仁甲670号（注34）」

※　義仁甲とは蒋介石の電報名だと考えられている

※　繆斌は、3月17日に来日した。その二日前に、蒋介石に具体的指示を求めたと推測される

三文字は、東條英機、松井石根、土肥原賢二、板垣征四郎、木村兵太郎、武藤章、広田弘毅の7人が死刑を執行されたのち、その遺体や遺骨、位牌の引き取りのために奔走した。三文字らの努力により、1960年、愛知県西尾市の三ケ根山に「殉国七士廟」が建設された

ウ　何応欽の述懐（蒋介石の右腕。南京での日本軍の降伏式で、中国側代表）

三文字正平は

「アメリカからの帰りに渡日した何応欽は、『惜しいことをした。私がアメリカに行かずに中国にいたならば、決して彼を殺しはしなかったものを』と語っていた。繆斌の人格については生証人として何応欽氏が現存している」と結んでいる　⇒何応欽は、黄埔軍官学校時代、繆斌と生死を共にして戦った兄弟同然の仲

エ「白団」団長富田直亮少将の告白　※伝聞供述だが、刑事訴訟法的には証拠能力あり

1989年10月21日の中野正剛墓前祭の折、白団長で蒋介石の側近であった富田直亮は、蒋介石が「あれは私がやった。あんなことにならねば、こんなことにはならなかったろう。日本が取り上げなかったことは誠に残念であった」と述懐したことを披露した　⇒蒋介石は1975年に逝去。富田は、もうこの事実を披露してよいと考えたのだろう

※白団とは、岡村寧次大将を筆頭に、蒋介石の以徳報怨の恩に報いるため、有志の元軍人たちが密かに台湾に渡り、蒋介石の台湾防衛の軍事作戦を支援したもの

オ　横山銕三による渾身の真相解明　「繆斌工作成ラズ」の刊行

横山は、新民会で繆斌の部下として3年間仕え、一貫して日中の友好と和平に腐心した。繆斌が処刑されたことへの痛恨の思いから、同志の支援を得て、この工作の真実性を証明するため、1984年に上海に渡り、繆斌工作に直接関与した生き証人の証言を得るなどして、10年間におよぶ執念の調査を続け、1992年に同書を刊行した

田村眞作も、同じ思いから「繆斌工作」「愚かなる戦争」の2冊を刊行した

横山隆一
「繆斌工作」成ラズ
愛色濃い昭和二十年
愚かなる戦争
田村真作著
創元社
繆斌工作
田村真作著

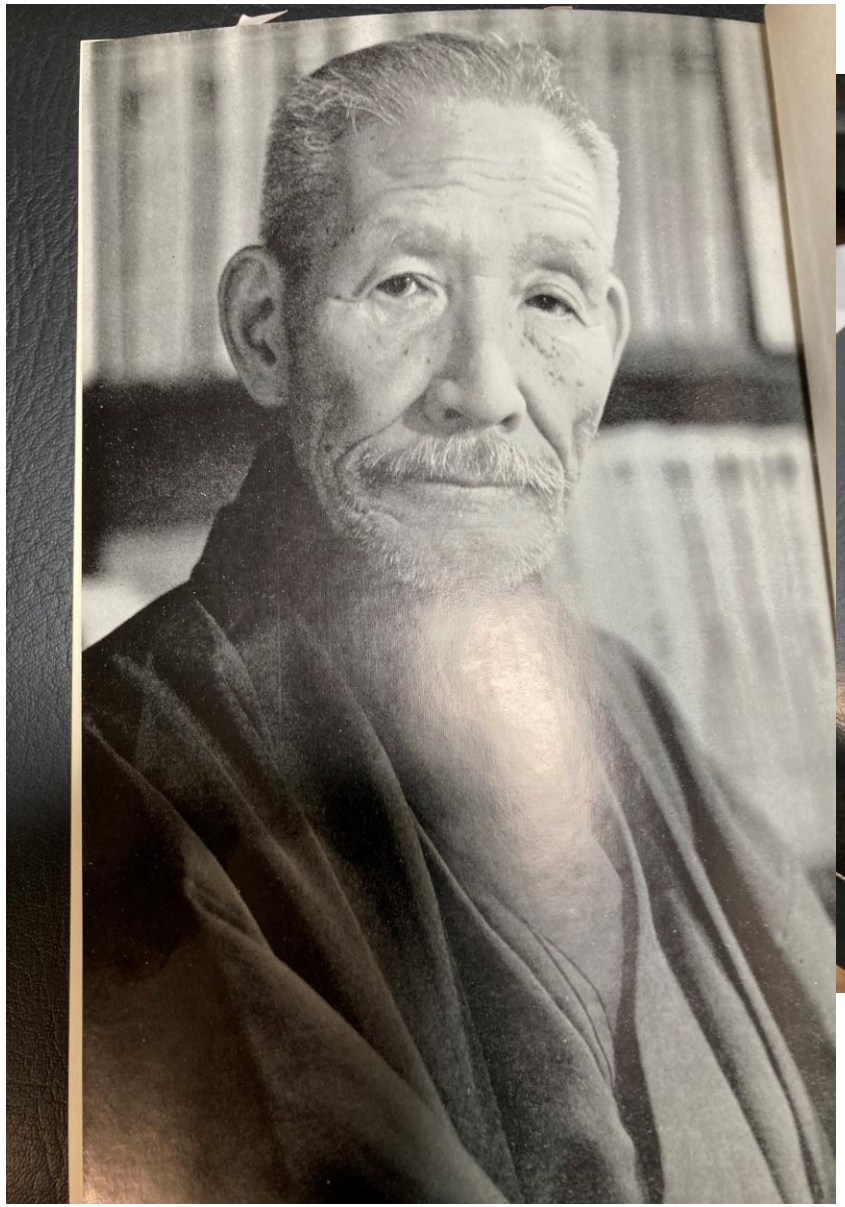
近衛文麿のブレーン
中山優選集

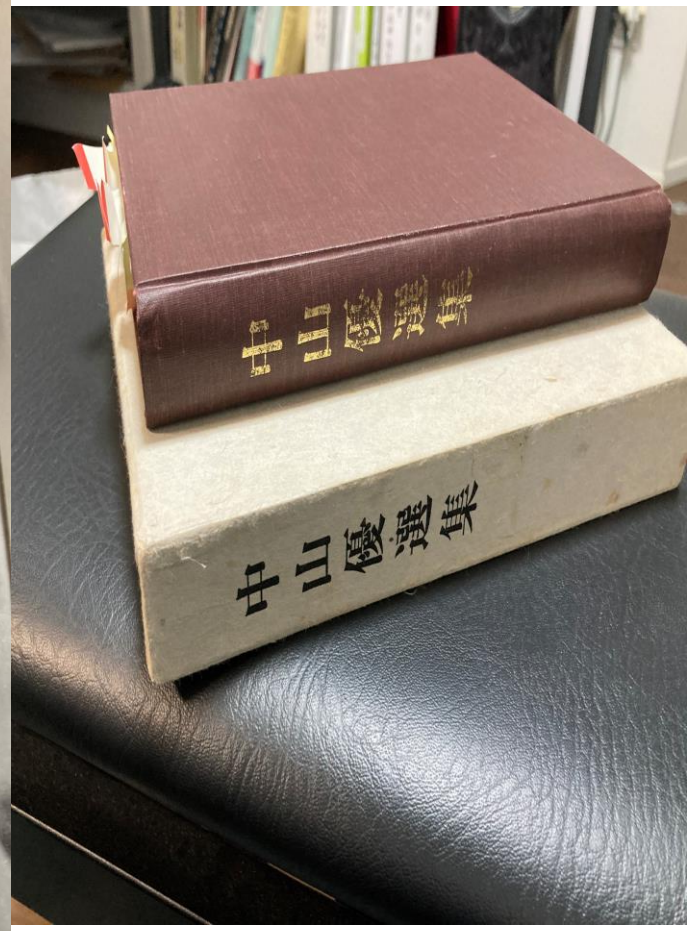
繆斌と深く交友し、日中和平に心血を注いだ気骨の漢学者

名利を一切求めず、日中双方の人々から慕われた

文麿の息子近衛文隆は、上海東亜同文書院に在職中、中山と共に対重慶和平工作を試みた

文隆は中山を深く敬愛し、ソ連に抑留中も中山を慕い、思い出話が尽きなかった

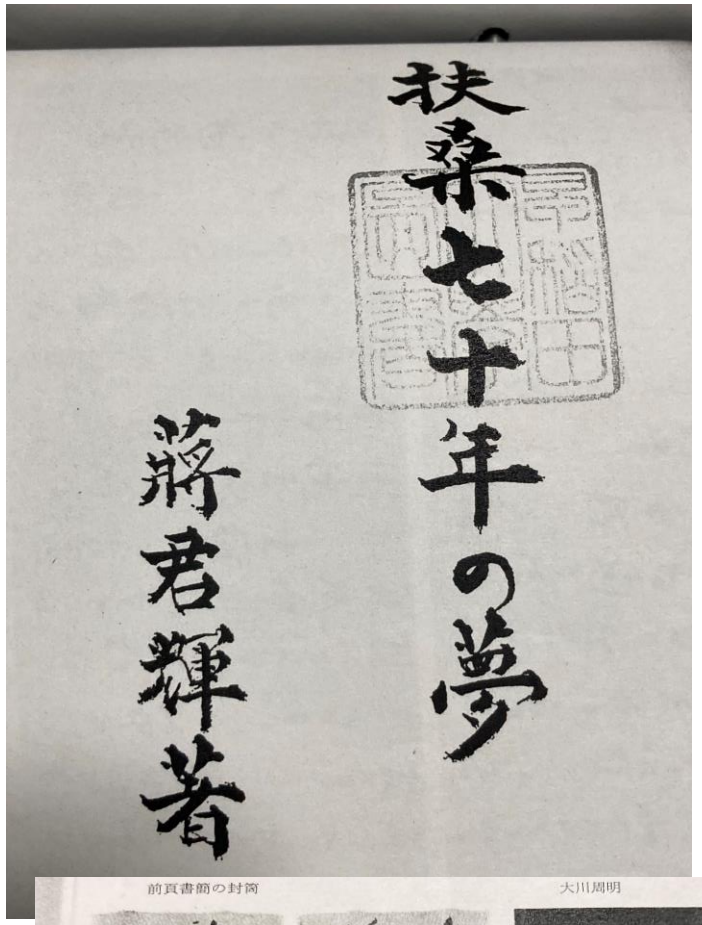


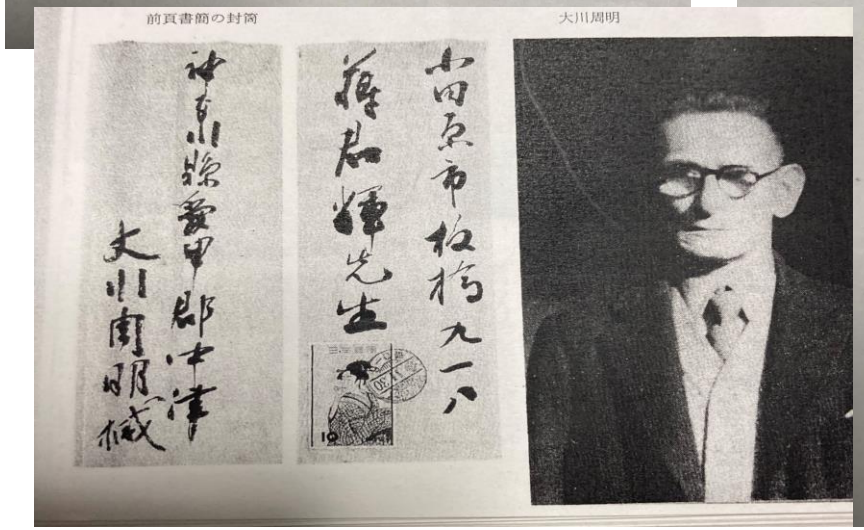


蔣君輝

扶桑七十年の夢

左下は、大川周明の
蔣宛の手紙





『扶桑七十年の夢』刊行を祝って

蔣君輝先生は今年八十二歳を迎えられました。今を去る七十年前先生は笈を負うて来日されたのでありますが、その間多くの日本人と交りを結び、日本を知ること甚だ深く、又この上なく日本を愛しました。日華事変の起る前、両国のあいだに低迷する暗雲の間を奔走し、我が政府を動かしてアジア人同胞が殺戮し合う愚を免れしめんとしました。不幸にして事変勃発となった後においてもなお望みを棄てず両国憂国の同志に訴え、手を携えて政府当局に対し政策の変更を要請しました。

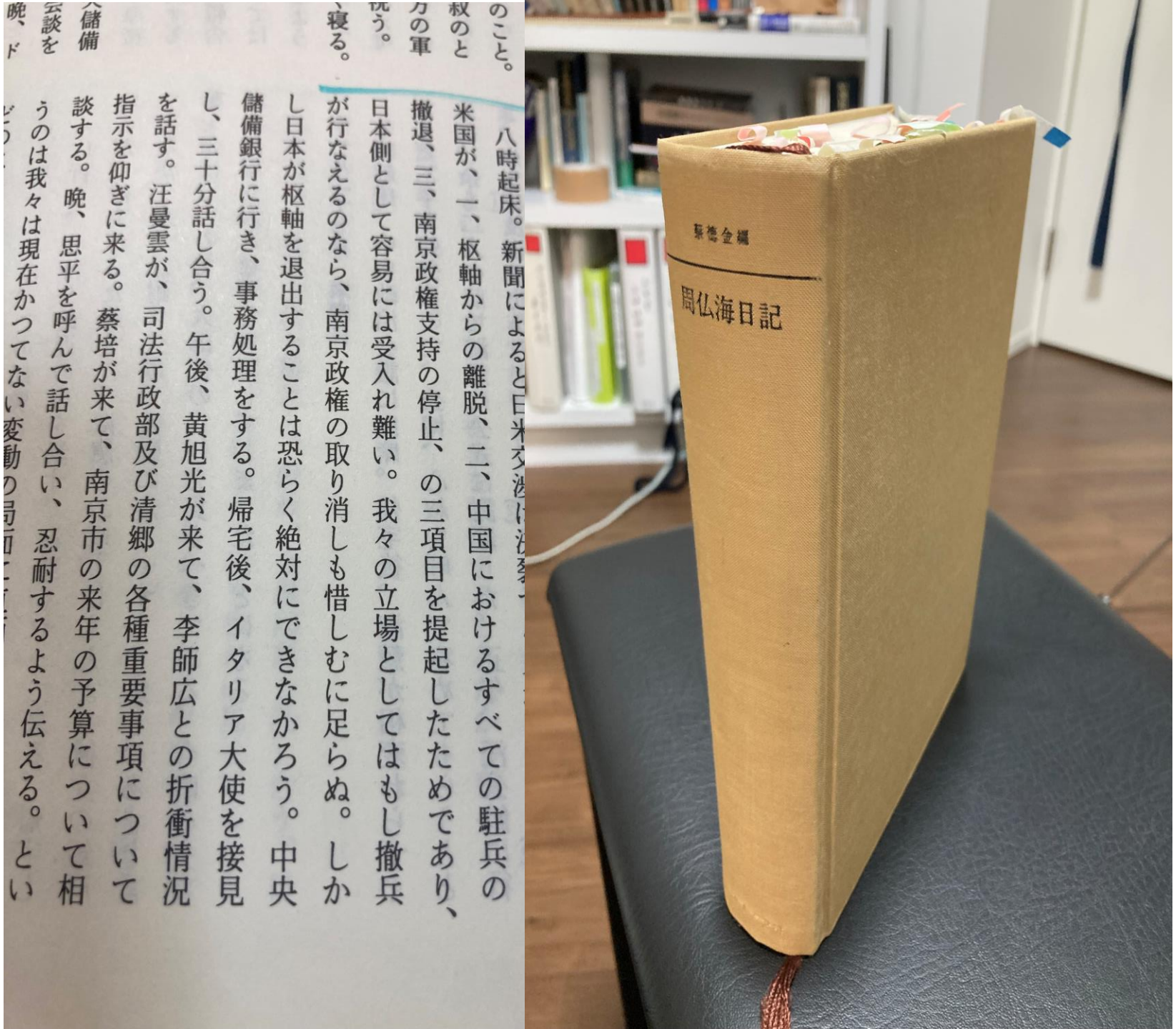
この蔣先生の衷情に対しては日華両国の同志も積極的な協力を惜しまなかったのでありますが、その効空しく遂に避けられなかった八年戦争は両国民相憎み敵視する結果となりました。

しかるに日華相剋修羅の間においても先生はなお友情を棄てることなく和平の達成に肝胆を砕き、遂に終戦間際には和平工作に参画し、又終戦に際しては在華日本官民にして先生の隠れた努力により助命されたもの少からざることは知る人ぞ知るであります。

時は流れて戦争後三十年を経過した今日、我々は蔣先生の日華融和のために傾けた努力の思い出を

周仏海日記

「撤兵が行えるのなら南京政権の取り消しも惜しむに足らぬ」
1941.11.29



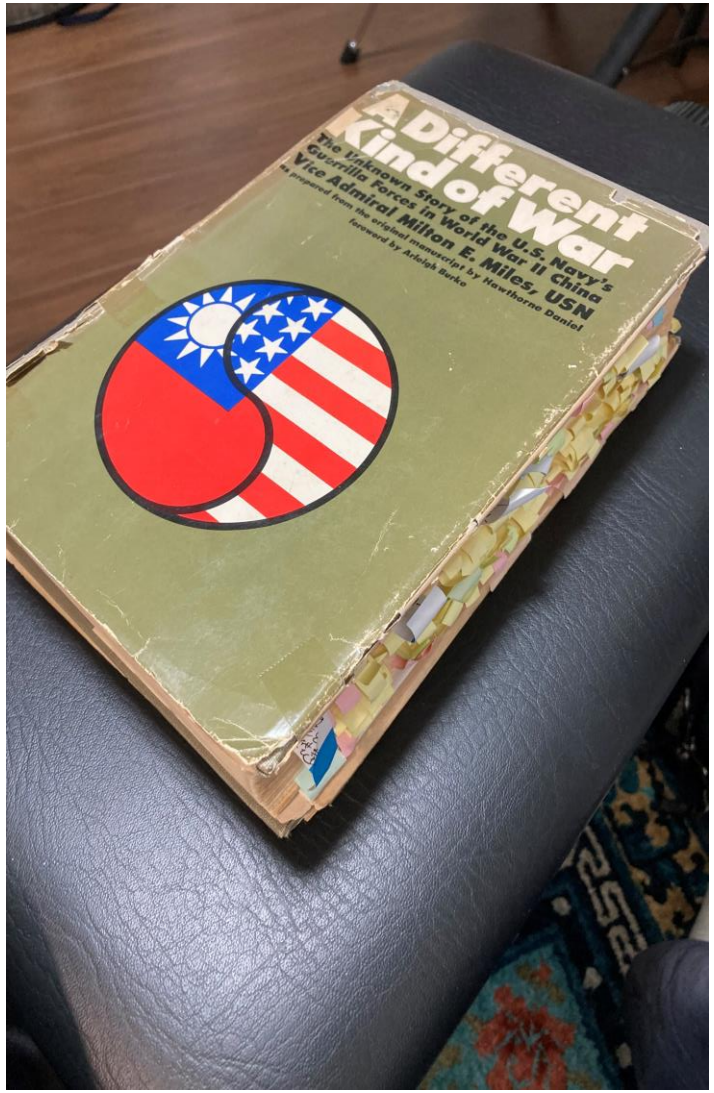
八時起床。新聞によると日米交渉は決裂

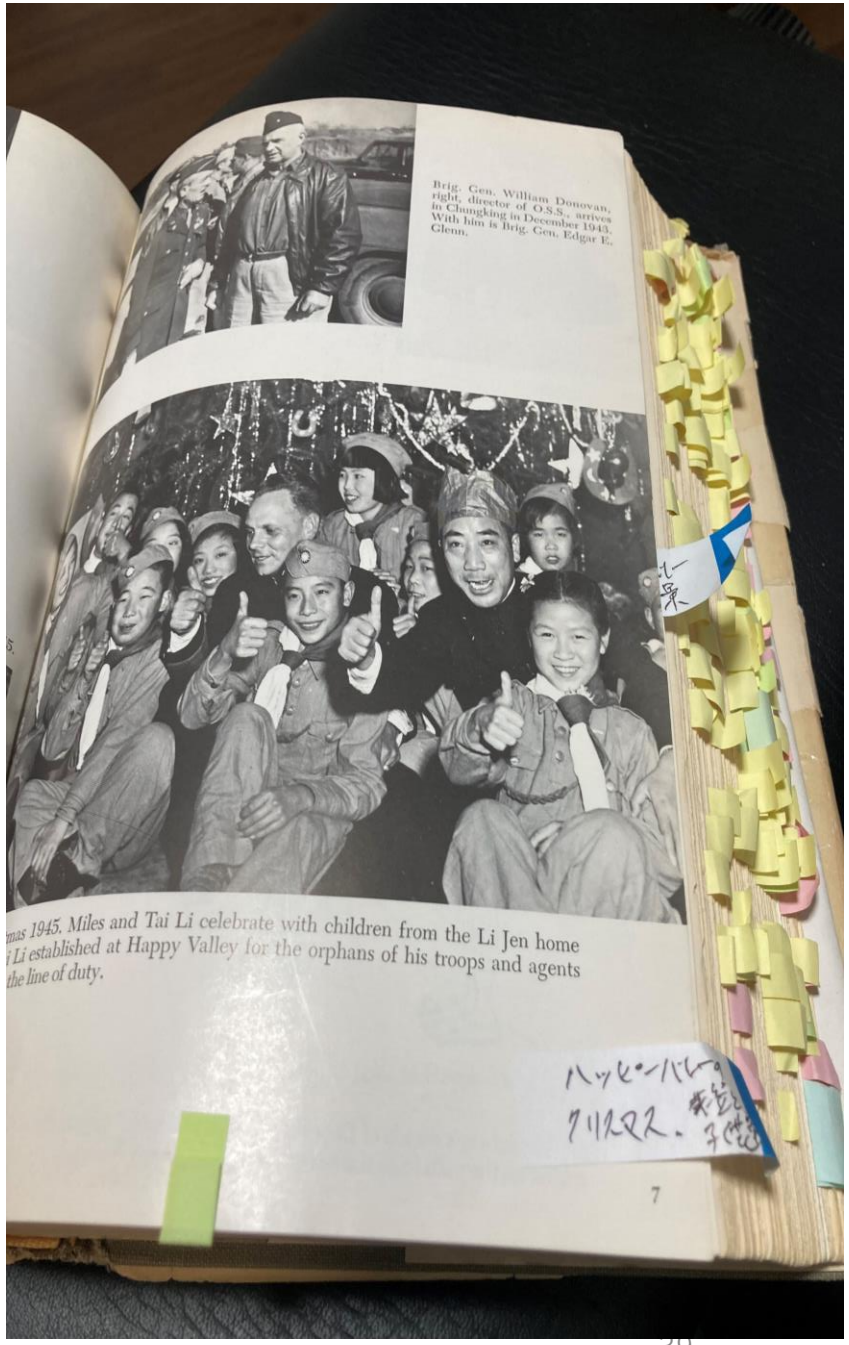
米国が、一、枢軸からの離脱、二、中国におけるすべての駐兵の撤退、三、南京政権支持の停止、の三項目を提起したためであり、日本側として容易には受入れ難い。我々の立場としてはもし撤兵が行なえるのなら、南京政権の取り消しも惜しむに足らぬ。しかし日本が枢軸を退出することは恐らく絶対にできなかろう。中央儲備銀行に行き、事務処理をする。帰宅後、イタリア大使を接見し、三十分話し合う。午後、黄旭光が来て、李師広との折衝情況を話す。汪曼雲が、司法行政部及び清郷の各種重要事項について指示を仰ぎに来る。蔡培が来て、南京市の来年の予算について相談する。晩、思平を呼んで話し合い、忍耐するよう伝える。というのは我々は現在かつてない変動の局面に直面

M・マイルズ
A Different Kind of War(1967・絶版)

ハッピーバレー
（重慶郊外の抗日の秘密基地）でのクリスマス
戴笠やマイルズと子供達

※戴は、抗日戦で戦死した兵士の子供たちのために孤児院を設立していた

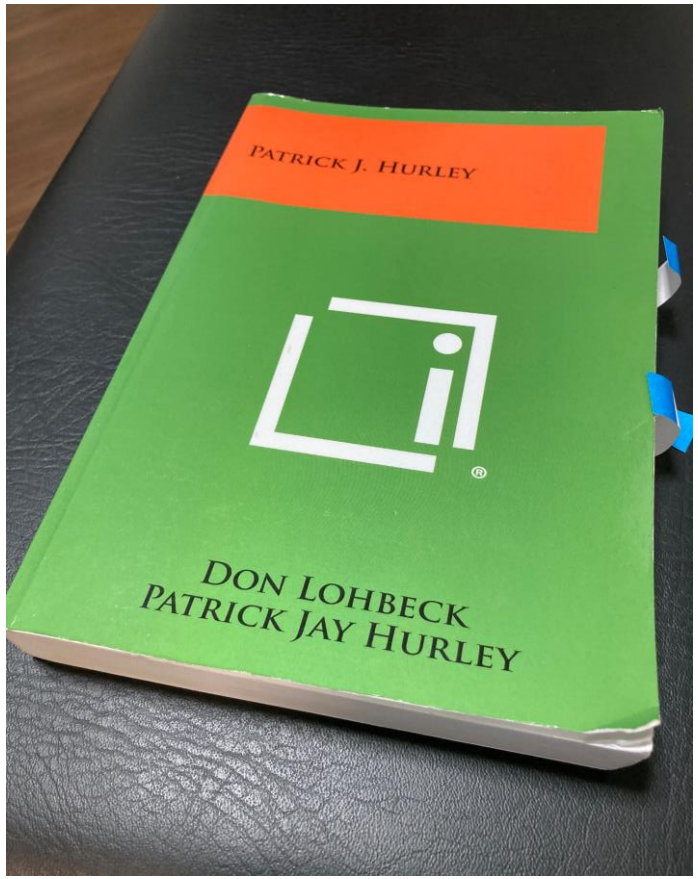


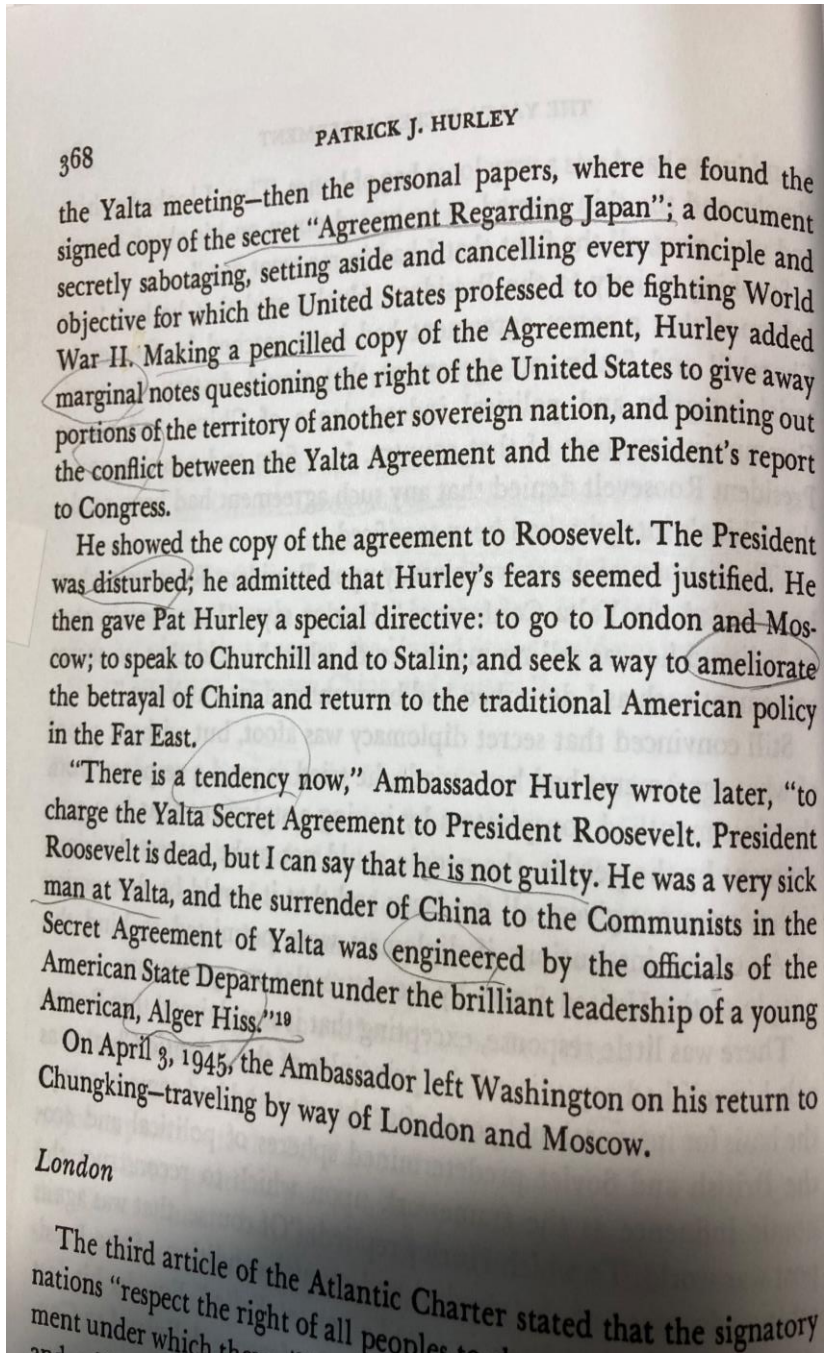


パトリック・ハーレー伝

（重慶の米大使）

蔣介石からヤルタ密約の疑いを聞き、ワシントンに飛んだ密約を発見し、ルーズベルトを追及
非を認めたルーズベルトから、ロンドンとモスクワに行って、チャーチル、スターリンに密約の改善を求める交渉の特命を与えられた
　ルは死期が迫っており、ハーレーはルを責める気にはなれなかったという
ハーレーは、1945年4月3日にワシントンを出発。ロンドン・モスクワ経由で重慶に向かった





368 PATRICK J. HURLEY

the Yalta meeting—then the personal papers, where he found the signed copy of the secret "Agreement Regarding Japan"; a document secretly sabotaging, setting aside and cancelling every principle and objective for which the United States professed to be fighting World War II. Making a pencilled copy of the Agreement, Hurley added marginal notes questioning the right of the United States to give away portions of the territory of another sovereign nation, and pointing out the conflict between the Yalta Agreement and the President's report to Congress.

He showed the copy of the agreement to Roosevelt. The President was disturbed; he admitted that Hurley's fears seemed justified. He then gave Pat Hurley a special directive: to go to London and Moscow; to speak to Churchill and to Stalin; and seek a way to ameliorate the betrayal of China and return to the traditional American policy in the Far East.

"There is a tendency now," Ambassador Hurley wrote later, "to charge the Yalta Secret Agreement to President Roosevelt. President Roosevelt is dead, but I can say that he is not guilty. He was a very sick man at Yalta, and the surrender of China to the Communists in the Secret Agreement of Yalta was engineered by the officials of the American State Department under the brilliant leadership of a young American, Alger Hiss."[19]

On April 3, 1945, the Ambassador left Washington on his return to Chungking—traveling by way of London and Moscow.

London

The third article of the Atlantic Charter stated that the signatory nations "respect the right of all peoples to
ment under which the

（付言）

天皇が工作中止の引導を渡したことは、昭和史の「時限爆弾」？軍部・政府の指導者らの誤った輔弼、輔翼によるものとはいえ、日本を救う可能性があった工作を天皇自らが封じてしまった

※時の総理と、天皇が信頼していた緒方が強力に進めていた工作を、なぜあれほど明確に否定・中止させたのか？

張作霖爆殺事件に関して田中義一首相へ詰め腹を切らせたことの反省から、天皇は軍事政治への影響力行使には非常に抑制的になった

二・二六事件における果断な判断、ポツダム宣言受諾に関する「聖断」は緊急事態における天皇の叡智の結晶

天皇が、極めて明示的に工作を中止した背景が不可解。三笠宮の上海渡航との関係？　それが裏目に出た可能性？

※これに関する私の推論は、「ゼロ戦特攻隊から刑事へ（増補新版）」の付記に書いた。極めて慎重な研究・検討が必要と思う。宮内庁の未公開資料を含め、研究者による研究進展に期待